

ジャパン・スポットライト 2017年3/4月号掲載（2017年3月10日発行：英文誌）  
ポール・スラシック氏（米国オハイオ州ヤングスタウン州立大学 政治学部 教授・学部長）  
コラム名：BOOK REVIEW

（日本語仮訳版）

## J.D.バンスの「ヒルビリー哀歌」と「二つのアメリカ」

### 「二つのアメリカ」と2016年のアメリカの選挙

2004年に、アメリカ民主党の大統領候補ジョン・ケリーは、ノース・カロライナ選出の上院一期を務めるジョン・エドワーズを、副大統領候補に選んだ。エドワーズの民主党大会での受諾演説は、数日前の、当時ほとんど無名であったイリノイ選出の上院議員、バラク・オバマの基調演説によって影の薄いものになった。オバマの演説は、2008年の大統領選挙で、勝利するまでになった彼の政治的飛躍を後押しするのに役立つものだった。

今や、オバマは大統領職を去ったわけだが、彼の遺した遺産の土台を根底から崩すのは、このエドワーズの演説であった。

エドワーズは、「ここに二つの異なるアメリカがある。一つは、アメリカの夢を生き、全く心配することのない人々のアメリカ。もう一つは、毎日その日暮らして、何とか帳尻を合わせて生きている人達のアメリカである。」4年後、このテーマは、エドワーズをアイオワ州の民主党大統領候補選挙で、第2位に押し上げた。当時の最も有力な候補者であるヒラリー・クリントンを上回った。第一位は、結局彼女を、その大統領選挙で破った、バラク・オバマであったが。

オバマが、団結を強調したのに対して、エドワーズは、分裂を強調した。このことは、遡って、2004年の民主党大会の時と同様だった。エドワーズの「二つのアメリカ」に対して、オバマの演説は、「アメリカを赤い州と青い州に切り刻みたい」メディアの評論家を批判した。8年間のオバマの統治の間で、しかしながら、その団結は、少なくとも経済と人種の領域では、一度も実現出来なかった。ドナルド・トランプは、この分裂を利用することに成功した。このことは、我々の目を、J. D. バンスの「ヒルビリー哀歌」（2016年）に向けさせる。この本は、アメリカのみならず海外でも大きな賞賛を呼び、エコノミスト誌は、この年のアメリカについての最も重要な本であると述べている。

この本は、多くの関心を集めた。なぜなら、アメリカを分断させている経済的また文化的違いの深奥とその複雑さを語っているからである。同時に、この「二つのアメリカ」は、一つになることが出来るのか、またどうすればそうなるのかについても重要な問題提起をしている。

### 白人労働者階級

本が出版されたとき、著者は31歳に過ぎなかったので、これを回顧録のように見なされ

ることに、奇妙な感じを受けると、著者は、前文で認めている。さらに、彼がこの本を書く前は、全く著名ではなかった。だから、誰が、彼の人生についての本など読む気になるだろうか。

この本の一番最初から明確なことは、著者が彼自身の体験を語るだけでなく、社会経済階級全体について語ろうとしていることである。彼が説明しようとしている階級、すなわち「白人労働者階級」こそがドナルド・トランプをアメリカ合衆国第45代大統領に押し上げたものである。この選挙結果は、殆ど全ての人にとって、驚くべきものであり、それは、世論調査の結果とは異なっていたからというだけでなく、大学を出ていない白人の選挙民からトランプが圧倒的な支持を得たことだった。これらの支持は、数回の選挙のサイクルで、共和党に向かうものではあったが、トランプの、それらの共和党に向かう支持の3分の2を引き付ける力こそ、オハイオ、ペンシルベニア、ウィスコンシン、ミシガンといった、いわゆるスウィング州で、ヒラリー・クリントンを打ち負かすのに必要な、票差を彼に与えたのだった。

多くの選挙民は、バンスが育ったオハイオ州のミドルタウンのような小さな町に住んでいた。ニューミドルタウンの人口の大部分は白人で、圧倒的に低い教育水準だった。ミドルタウンの人口の16%以下が、大学を卒業しており、これは、アメリカ全体の平均値の半分以下であった。ミドルタウンの貧困人口の比率も全米平均の2倍近かった。このようなミドルタウンの状況は、決して珍しくない。経済的にみて、アメリカで大学教育を受けられなかった人達は、受けた人達とは、別のアメリカに住んでいる。例えば、彼らの失業率は、大学卒業者の失業率のほぼ2倍である。そして、仕事を見つけた場合は、賃金は低い。バンスが、本で、彼の隣人とその家族について描いているように、彼らは怒り、悲観的で、この社会システム全体が、彼らに敵対している、と確信している。

それでは、なぜ彼らは、トランプを支持したのか？バンスは、彼の家族は、多くの労働者階級の間同様に、民主党支持だということを明確にしている。バンスの祖母が言うように、民主党は、労働者の政党だからである。本当に、このような労働者階級の民主党支持者が、共和党の不動産王の候補者を支持するのは、異例中の異例である。バンスは、ここでも、「金持ちがすべて悪人というわけでないが、全ての悪人は金持ちだ」という彼の祖母の言葉を引用している。

### ミドルタウンとトランプ大統領

本書は、大統領選挙前に出版されており、バンスは、ミドルタウンにとってのトランプの魅力については、何の言及もしていない。しかしながら、ヒントはある。

第一に、バンスは、彼の家族と友人が、殆ど誰も信用しておらず、特に政治家とメディアへの不信について詳しく述べている。彼の祖母によれば、「彼らは、全員詐欺師」である。メディアがトランプに示した明確な敵意と彼が政治家ではないということは、ミドルタウンで人気を得るのに役立ったであろう。また、これは、見過ごしやすい点だが、バンスが家

族の言葉を引用する時、トランプの支持に結びつたかもしれない点を明らかにする。バンスの親戚の使う言語は、不作法で、猥褻である。バンスは、そのような言葉を排除していない。ミドルタウンの人々は、「政治的に正しい」以外のことそのものである。彼らは、トランプの粗野な言語を、信頼するに足る印として受け取った可能性がある。

バンスの回顧録には、更にもう一つの隠れた要素がある。それは、地方の鉄鋼会社、アームコ・スチールである。アームコで働いた彼の祖父について語る時、バンスは、この会社が与えてくれた職の確保と中産階級相当の賃金を指摘する。彼はまた、アームコが、地域住民に示してくれた、「奨学金提供、公園建設、無料のコンサート開催」といった寛大さについても言及する。ミドルタウンのような場所では、成功したビジネスは、必ずしも強欲で邪悪ではない。経営がきちんとしていれば、利益を生む会社は、町全体に貢献する。従って、トランプのビジネスマンとしての信用は、ミドルタウンのような地域では、プラスに働く。トランプの公約である「アメリカに製造業の雇用を回復させよう」（多分アームコ（現 AK スチール・ホールディング）のような企業に雇用をもたらそう）という言葉は、ミドルタウンの選挙民には、共鳴するだけでなく、リアルに響くのである。

### 家族の崩壊の話

本書が、経済と政治の本であるという印象だけ持つのは、誤りだろう。本書は、両方に触れてはいるが、主として文化についての話である。実際、本書の副題は、「危機にある家族と文化の回顧」である。そして、本書の大部分は、バンスの家族の人生についての物語である。

バンスの姉は、彼の母親が高校を卒業してすぐに生まれている。彼の母は、後年麻薬中毒だった。このことは、かつてアメリカ産業の空洞化が起こった際に、アヘン中毒が蔓延したことと重なる。本書で語られる最も心の痛む場面は、彼の母が、薬物試験にパスして職を続けられるように、息子である彼に対して、彼の尿のサンプルを彼女のものとして提出できるように、提供してくれと頼むところである。

幼いバンスは、祖父母である「おじいちゃん」、「おばあちゃん」に育てられる。彼の祖父は、以前は暴力をふるうアル中であつたが、今は治っている。放課後、祖父は、毎晩バンスと数学の問題を解く。バンスの最も重要なお手本は、しかしながら、祖母のようである。おばあちゃんは、難しい性格だ。粗野で、明らかに暴力的な一面はあるが、その底に、優しさを持っている。バンスは、彼女のことを、「ピストルを持った狂人」と呼んでいる。彼女は、12歳の時に、家の牛を盗もうとした泥棒に発砲して、怪我を負わせたのだ。しかしながら、一方で、彼は、祖母が10代で学校を終え、そんな夢など実現不可能であつたにもかかわらず、子供のための弁護士になることを夢見たことも知っている。結局のところ、バンスを救ったのは、彼女のおかげという面が強い。彼女は、バンスが望んだもの、即ち安定した家庭というものを与えた。祖母と暮らすようになる前に、次のように、バンスは、自分の人生について述べている。

「3年生の途中で、私たちは、プレブル郡で、ボブと暮らすために、ミドルタウンと祖母の家を離れた。そして4年生の終わりに、ミドルタウンのマッキンレー通り200ブロックの家に住むために、プレブル郡を離れた。5年生の終わりには、その家を離れ、同じ通りの300ブロックに引っ越した。その時までには、チップは、私たちと住むことはなかったが、いつも私たちの家に来ていた。6年生の終わりに、まだそこに住んでいたが、チップはスティーブに代わっていた。7年生の終わりに、マットがスティーブに代わり、母は、マットと一緒にデイトンに移ろうと考え、私も一緒に来るものと考えていた。9年生の終わりに、私は、全く知らない人で3人の子持ちのケンと一緒にだった。このような生活の全てに加えて、薬物と家庭内暴力と私たちの生活を詮索する子供の保護のための福祉事務所が存在し、かつおじいちゃんが、死にかけていた。」

10年生の初めには、バンスは、ずっと祖母と暮らすことにした。次のように、バンスは、この変化について書いている。

「私には、社会学者と心理学者が、同じ部屋で一緒にいて、なぜ私が薬物への関心を失い、学校の成績が良くなり、大学入学資格のための試験に高得点で合格したか、なぜ私を勉強好きにしてくれた2人の先生に会えたか、について説明してくれることが、確実に思える。しかし、私がとりわけ覚えているのは、自分が幸せだったことだった。もう、一日の終わりに鳴る学校のベルを恐れなくてもよいのだ。」

アメリカ海兵隊への入団も重要だった。彼に、世界を見せてくれるとともに、自己規律と自信を与えてくれた。彼は、イラクに派遣されたが、戦闘には参加しなかった。その代わりに、彼は、民生的な仕事を行った。この仕事で、バンスが言うところの特に重要で、また「転機となる」事件に出会った。彼は、イラクの学校を訪問し、学生たちに文房具を配った。彼は、一人の少年に小さな安い消しゴムをプレゼントした。その少年は、この小さい贈り物に興奮した。バンスは、「地球上で最も偉大な国に生まれて、自分は何と幸運なことだろうと思いはじめた」と書いている。

おそらく、イラクでのこの経験が、本を書くことを彼に促したと考えられる。しかしながら、このエピソードは、ミドルタウンについてのもう一つの真実へ、バンスが移行していくことを許容し、また読者にとっては、なぜ、「再びアメリカを偉大にしよう」ということを、選挙戦のテーマとしているトランプが、ミドルタウンの人々のような白人労働者階級にとって、とても魅力的な候補者となったかという疑問についての手がかりを提供するものだ。幾多の生活の困難にも関わらず、ミドルタウンの人々は、極めて愛国的である。バンスは、彼の祖母は、「二つの神、即ちキリストとアメリカ合衆国」を持っていたという。しかし、バンスはまた、彼らがアメリカに対する信頼を失いつつあることにも注目している。それは、中東での戦争の失敗や困難なアメリカ経済の状況だけでなく、オバマ大統領その人も問題

と見られていた。オバマは、バンスは書いているが、「肌の色とは無関係の理由で、多くのミドルタウンの住民にとって異星人のようなものだった。彼は、優秀で、富裕で、また憲法学の教授のように話す。彼についてのいかなることも、自分が尊敬するどんな大人にも似ていない」

このように、先に述べたように、我々には、二つのアメリカがある。バンスは、どちらを彼が好むかについて、何の疑問も抱かない。彼は、いわゆるエリート文化の方が、安定的であり、また彼の育った文化より、もっと健康的である。また、そちらの方が、自然の趨勢として、より大きな経済的成功に結び付く。

彼の観察で最も面白いものの一つが、宗教についてである。

彼は、中西部の人の宗教性については、疑問を投げかける。彼の経験では、彼の友人と隣人は、実際に教会の礼拝に行くよりもっと多く教会に行っていると主張する。これは、残念なことだと、バンスは思う。なぜなら、宗教は、成功に必要な人生の組み立て、価値観、そして自己規律を提供してくれるからである。

## 貧困の文化

多くの意味で、文化的社会的慣習と経済のパフォーマンスとの間に関係があるというバンスの議論は、新しいものではない。1965年に、後にアメリカの国連大使、ニューヨーク選出の上院議員となるダニエル・パトリック・モイニハン、当時は、殆ど無名のリンドン・ジョンソン政権の労働次官だったが、アフリカ系アメリカ人が陥っている貧しい経済状況の解明を試みた。78ページにも及ぶ「黒人の家庭：国家的なアクションを必要とするケース」（しばしばモイニハン・レポートといわれる）を発表し、論議を呼んだ。レポートの冒頭、モイニハンは、次のように、結論を要約している。

「基本的な問題は、家族の構造である。都市の貧民街の黒人家庭は崩壊しつつあるという証拠がある。中産階級は、何とか生き残れているが、非熟練の教育水準の低い労働者階級の多くの人々にとって、伝統的な社会関係の構造は、完全に崩壊してしまっている。この状況が続く限り、貧困と格差の悪循環は繰り返されるだけである。」

モイニハンが、これを書いたとき、4人に一人のアフリカ系アメリカ人の子供は、非婚姻の関係から生まれた。今日では、残念なことに4人に3人の比率に近い。白人の子供も、現在は、1965年の黒人家庭と、ほぼ同じ状況である。婚姻外の出産は、大卒の女性では、稀なので、白人人口の増加の大部分は、大卒でない人たちの出産から起こっている。バンスが、自分の育ちの中で、見出した状況は、モイニハンを驚かせることはなかったろう。しかしながら、モイニハンにとってと同様、その解決策は、見つけにくい。

## 望みのないヒルビリー達

ミドルタウンについて語る時、バンスは、「文化として、我々にはヒーローなどなかった」と指摘する。指導者（エリートたち）は、彼らが得をしている根本的に不公正なシステムを維持することにしか関心がないと思われていた。バンスによれば、このような理解がもたらす問題は、無責任を生み出すことである。もし、失敗した場合、それは、自分の責任ではない。社会システムが自分たちに悪いように出来ているからだという。この感情が、絶望感につながっていく。バンスは、彼が知るミドルタウンの人々は、人より抜きんでるためには、金持ちに生まれるか、または、例外的に頭がすごくいいかのどちらかだと考えていると指摘する。明らかに、勤勉は、ほとんど役立たない。奇妙なことに、バンスはこの見方を批判しているにも関わらず、彼自身の経験のいくつかは、このミドルタウンの住民の疑いを正当化している。明らかに、彼は、「例外的に頭がいい」人の一人だからで、彼の成績が、結局は、エール大学のロースクールへの入学を可能にしたのだから。

しかしながら、エール大学に行ったとき、彼は、州立大学の出身者ということで、少なくとも教授の一人から、軽蔑された。ただし、エールで、彼が能力を示すと、システムは彼の有利に働いた。エールで、彼は、エリートの人脈に入る。彼の教授たちは、法律家の有名人であり、彼の指導教授の一人、エイミー・チュアは、「教育ママ讃歌」（2011）というベストセラーを書いている。彼らは、ミドルタウンの彼の隣人などが想像も出来ないやり方で、彼を、自分たちのネットワークに引き入れて行った。それにしても、彼は、それに適応するための困難さについても語っている。例えば、トップの弁護士事務所でのインタビューの際の、彼のいう「社交上の試験」に合格することの困難さなどである。彼が、良い方のアメリカに入ることを許されてもなお、まだ「二つのアメリカ」は存在し、彼自身の中で、文化的部外者として、残っている。

## 答えのない問題

結局、バンスの本は、答えより、より多くの疑問をなげかける。例えば、彼は、彼が育った町の人々が経験した問題は、どうもスコットランド・アイルランドの民族的背景と関係があるように考えているようだ。しかし、都市の空洞化という矛先を生み出し、トランプを支持した多くの労働者階級の選挙民が住む工場の町は、スコットランド・アイルランド系だけでなく、そのルーツを東欧系に遡る人が多く存在する。彼らが、同様のマイナスで反生産的な文化的特徴を備えているなら、文化は経済に影響を与えるのか？あるいは、経済が、文化を決定するのか？これらの衰退都市に新しい職を導入すれば、それで事情は異なってくるのか？それが、文化を変えるのだろうか？マクロ経済の問題は、もっと難しい。アームコ・スチールについて論じながら、バンスは、この企業が、外国の投資から、利益を得ていることを認めている。つまり、AKスチール・ホールディングの大株主として、日本の川崎製鉄があるからだ。そして、そのAKスチールの現在の顧客の中には、国内、国外両方の自動車企業が含まれる。もし、トランプの貿易政策が輸入にダメージを与えるなら、ミ

ドルタウンのような町のAKスチールのような多国籍企業は、どのような影響を受けるのだろうか？

バンスの本の真の価値は、「二つのアメリカ」に分断するものの深さと複雑さに我々を正面から向き合わせてくれることである。願わくは、今までとは違う政策を作り出すために、白人労働者階層の重要性を勘案するといったことを超えて、米国内の保守派とリベラル派の間で、真剣な議論が行われることを期待したい。この問題が、主として文化の問題であろうとなかろうと、これは、重要である。1965年のモイニハンレポートは、今日のアメリカを予知したものであったが、彼、モイニハンは、かつて次のように言っている。「重要な保守的真実は、社会の成功を決めるのは、政治ではなくて文化だ。重要なリベラルの真実も、政治が文化を変え、文化をそれ自身から救えるということだ」

(了)